平成 28 年度研究協議会資料　　【新規】

都道府県・指定都市番号	３０	都道府県・指定都市名	和歌山県	研究課題番号・校種名	１　高等学校
				教科名	看護

研究課題	**学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究** 体験や実践的な学習を通して生徒の思考力、判断力、表現力を高める工夫改善と学習の実現状況の把握についての研究
学校名（生徒数）（ふりがな）	和歌山県立熊野高等学校（わかやまけんりつくまのこうとうがっこう）（６９１人）
所在地（電話番号）	0739-47-1004
研究内容等掲載ウェブサイト URL	admin@kumano-h.wakayama-c.ed.jp

研究のキーワード

主体的な学び（TBL 学習・ロールプレイ）・互恵的関係づくり（ピア評価）・知識の統合・リフレクション（ポートフォリオ）

研究結果のポイント

○ 生徒の主体的な学びを育み問題解決能力・集団行動能力の獲得できるアクティブラーニング（TBL 学習、ロールプレイ）を取入れ、以下の成果を得ることができた。

① 各自の責任が明確となりチーム活動に対する貢献への責任性を得ることができた。

② 学習活動の中から事前学習の重要性を理解することができた。

③ 客観的に他者を理解し、互恵的関係づくりの重要性を理解することができた。

④ 自己発信することで新たな自分を振り返ることができ自己肯定感を高めることができた。

１　研究主題等

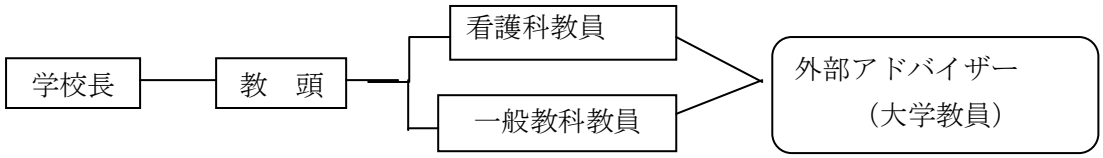
（１）研究主題

体験や実践的な学習を通して生徒の思考力・判断力・表現力を高める工夫
～生徒がやる気になる協働学習の工夫とピア評価の充実～

（２）研究主題設定の理由

本校看護科は５年一貫教育校で、卒業すると生徒は、看護の専門職として医療の現場で活躍することが期待されている。そのため、「社会人基礎力」として、前に踏み出す力・考え抜く力・チームで働く力が必要である。本校生徒は、素直で情緒豊かであるが、学習面においては、受動的で主体性が乏しい。入学時の意欲を５年間継続することに困難を感じている生徒もいる。また、５年間同じクラスで有りながら、関係が乏しい生徒同士もいる。そのため、協働学習を通して看護職に必要な探求力・コミュニケーション力を育み、看護を学ぶ楽しさを得られピアの力を信じ合えるような指導を工夫する。今回の研究では、この取組について検証し、評価を行う。

（３）研究体制



（４）１年間の主な取組

	実施時期	取組
平成28年度	平成２８年前半	１研究体制を整える。 ① 研究グループを編成し役割を確認する。 ② 研究の取組の詳細計画を立案する。 ③ 専門家による助言をうける。 ④ 協働学習の研修会に参加し、研修報告を受け学びを共有する。 ⑤ TBL 学習の学習会を実施し、教員間の共通理解を図る。 ⑥ 地域保健センター及び関係者との協議
	平成２８年後半	２研究授業・公開授業を実施し、取組について、検証・評価し、今後の課題を明確にする。 ① 改善工夫した協働学習法を活用した授業を実施する。 ② ピア評価（定量評価）の実施。 ③ 研究協議、生徒や参観者へのアンケートを実施する。 ④ 検証・評価をまとめ、改善点を明確にする。

２　研究内容及び具体的な研究活動

（１） 研究内容

１）主体的な学習（TBL 学習）の理解

TBL 学習を効果的に行うために TBL 学習がどのように進んで行くのか説明。始めにクラス内で４～５人のチームを編成し、クラスの中で全員一斉に学習活動を行う。TBL 学習形式で進めるには、３つのステップがある。ステップ１は、授業に参加する前に予習資料を配付、それによって授業に参加する前に個々に基礎知識を習得し準備を整えて授業に参加することができる。ステップ２は、十分に予習をして授業に臨んでいるか確認することで、まず生徒一人ひとりに予習内容に沿った多肢選択テスト（ｉＲＡＴ、個人テスト）を行う、テスト終了後解答用紙を回収。引き続きチームで同じ問題（ｔＲＡＴ、チームテスト）を取り組む。正答に到達するまで自分達のペースでディスカッションすることができるように解答用紙は、スクラッチカードを用いた。終了後、クラス全体にチームとしてテストに対する意見や質問の機会（アピール）を与え、最後にｉＲＡＴ、ｔＲＡＴ、アピールの状況に合わせて、教員が補足説明を行う（フィードバック）。ステップ３は、ステップ２までで得た基礎知識を使って解決すべき応用問題に取り組ませた。

２）コミュニケーション力を育み実践力を高める工夫

ステップ３の応用問題は、専門的な臨床実習前であり実際の臨床状況の理解や対応が可能になるよう、シミュレーションのロールプレイを行い、患者、家族、看護師等などの立場を理解し、臨床現場を再現することで、コミュニケーション力を育み実践力を高める工夫を行った。

３）互恵的関係づくりの工夫

主体的な学習活動が効果的に行うためには、生徒全員が参加し、お互いが高められる互恵的関係づくりが大切になる。そのため学習開始前に、ホームグループの編成と学習活動のルールづくりについて工夫を行った。また、ピア評価を行いチームへの貢献度を評価し、改善のための伝え方の練習をすることで個人とチームの学習に対する責任感を強化できるようした。

４）知識の統合のための工夫

「看護の統合と実践」は、看護に関する各科目で習得した基本的な看護の知識と技術を臨床実

践に活用できるよう統合させることを目的としている。そこで、年齢・性別・疾病が異なり、各科目の知識の統合が必要な事例を設定した。

５）自己肯定感を高めるための工夫

ポートフォリオやリフレクションを行い自己のプロセスを認め振り返ることができる。またピア評価を取り入れることで自己を対象化して振り返ることができ自己肯定感を高めることに繋げた。

（２）具体的な研究活動

１）主体的な学習（TBL 学習）の理解

ＴＢＬ学習を導入する前に、生徒へ以下の３点について説明し、理解を得た上で実施した。

① ＴＢＬ学習の進め方

② ＴＢＬ学習中の教師の役割

・発表に対する評価をしない、また、答えを与えない。

・作業手順については指示を行い、チームの観察は常に行う。

③ 授業毎に振り返りシートを記入する。

振り返りシートの内容は、授業全体が 5 項目、話し合いが 5 項目、グループが 6 項目の計 16 項目について数字で尺度を記入するものと自由記入欄を毎回記入させた。

２）コミュニケーション力を育み実践力を高める工夫

ＴＢＬ学習の３ステップである応用課題のケーススタディは、実践に即した看護過程の展開における思考力・判断力など基礎的な能力が要求される内容とした。それを各チームで読み解き問題点を抽出。応用課題「退院にむけて模擬指導」をロールプレイで実践した。実施中は、他学年や違う事例を担当したメンバーに見学してもらい意見交換を行った。

３）互恵的関係づくりの工夫

①ホームグループ編成について

[1)]浅海による「主体性尺度」を引用した質問紙によるアンケートと「夏休みの課題テスト」から、やる気と知識の平均値がほぼ同じになるようホームグループを編成し、活動がスムーズに行えるよう工夫した。グループは 4~5 人１組で 8 グループ編成した。

②グループのルールづくり

ルールづくりにおいては、「ア．個人の責任を明確にする。イ．参加の平等性を図る。ウ．互恵的な協力関係をつくる。」を目標に各グループで活動のルールを作成した。学習活動中、ルールを意識して行動するよう必要時助言した。

③振り返りシートの「グループ」の評価が、前回より低下した次の授業前には、必ずルールの確認を意識するよう助言してから活動に入るようにした。

④ [2)]安永らの「協同認識尺度」を引用し量的評価する。

⑤ ピア評価は、「Ｋｏｌｅｓの方法」で量的評価する。

４）知識の統合のための工夫

今回、年齢・性別・疾病が異なる２つの事例を設定し、１事例それぞれに４グループが取り組むこととした。事例Ａでは小児看護・母性看護・在宅看護を、事例Ｂでは、成人看護・在宅看護・社会保障の知識を統合する課題設定とした。

５）自己肯定感を高めるための工夫

①授業の到達目標を自分で設定することで自己の明確なゴールを目指すことができる。毎時自分の目標シートを見ることで、今行っていることの自己理解ができ学習意欲を高める工夫を行った。

②前回の振り返り記録紙に書いてある質問、意見を必ず授業導入の際に伝え返答する。自分で調べ

学び考えたことを何度もみることができ、自己の課題に気づくことができるようポートフォリオを活用した。

③ピア評価を取り入れ、自己を対象化することができ、自己と他者を客観的にみることができ自己肯定感を高める工夫を行った。

３　研究の結果と今後の取組

（１） 研究の結果

○　各自の責任が明確となりチーム活動に対する貢献への責任性を得ることができた。
授業後の振り返り５段階の自己評価の平均値において「話し合いにどれほど貢献したか。」では、3.76 から 4.62、「授業中どれほど真剣に考えたか。」では、4.62 から 4.92 と数値が高くなっており、協同活動の中で各自が責任をもって取組んでいたことがわかる。「グループ間での意見交換が活発になっている。」「グループ活動が楽しい。」等の意見もあり一人ひとりが責任を果たし主体的に行動できていたと考えられる。

○学習活動の中から事前学習の重要性を理解することができた。
授業後の振り返りシートにも「事前学習の大切さがわかった。」等の意見があがっている。
ＴＢＬ学習導入前後のピア評価において「チーム課題に対する準備をきちんとしている。」が 1.3%増えている、チーム活動を円滑に行うために時間管理とメンバーとの役割分担をして協調して活動する重要性が理解できた。それらを進めていくための事前の取組みであると理解できた。

○　客観的に他者を理解し、互恵的関係づくりの重要性を理解することができた。
チーム活動を通して仲間と共に課題解決する「学ぶ楽しさ」を感じている。ピア評価を行うことで、客観的に他者を見ていくことができ、授業後の振り返り５段階の自己評価の平均値において「メンバーから認められると思いますが。」では、3.76 から 4.78、協同効用因子 61.3 から 72.4 と数値が高くなっている。

○自己発信することで新たな自分を振り返ることができ自己肯定感を高めることができた。
ステップ２のアピールの意見交換やステップ３の応用課題であるロールプレイ後の振り返りの意見交換など、自己発信の機会を多く与えた。授業後振り返り５段階の自己評価の平均値において「授業中どれほど真剣に考えましたか。」では、4.62 から 4.92 と数値が高くなっている。
以上の結果から、ＴＢＬ学習を取り入れグループ活動を重視し、グループで課題を見出し実践をすることでコミュニケーション力を育みチームで働く力を育成できたと考える。

（２） 今後の取組

○ＴＢＬ学習を通して学習活動の中から事前学習の重要性を理解することができたが、事前学習の内容が画一化して、一つの答えしか考えることができない傾向にある。そのため、ポートフォリオに、個人的な特徴が乏しい。多方面の視点で調べる、考えることが必要であり、資料の探し方、調べ方も工夫できるような関わりが必要がある。

○協同効用因子は、61.3 から 72.4 と高い数値になっているが、個人志向も 2.1 から 3.0 と上がっている。チーム力が高くなるためには、メンバーの働きやメンバーとの関わりを理解しておくことが大切であり、チームの中でいろんな役割ができるようなチーム活動を工夫する必要がある。

【引用文献】

１）浅海健一郎　「主体性尺度」　2009 九州大学心理学レポート
こどもの主体性と適応感の関係に関する縦断的研究

２）安永悟・長濱文与　「協同認識尺度」　2009 協同作業認識尺度の開発
教育心理学研究